

## 『ふくしのまちづくり講座』特集号②

### 1. 門司区・萩ヶ丘校区

#### 「みんなでつくる安心・安全な萩ヶ丘のまちづくり」

校区の喫緊の課題である災害時の福祉救援体制づくりをテーマに、参加者が自らまちの強みや課題を知り、今後の取り組みについて考え、活動をさらに充実させることを目的に講座を開催した。災害について考え、あらためて心と行動の準備の大切さを認識した。実際に大きな被害を経験した平成30年7月豪雨災害について体験報告会を行い、被災された方からの話は心に強く残り、「危機管理時の大切な事を気づかされた」「自分の食は用意しておく」など自分の命は自分で守るという意識の向上につながり、ひとりひとりの防災意識が高まった。

また、避難時の参考となる校区オリジナルチラシを作成し、全戸配付するなど活動の充実につながっている。



### 2. 門司区・大里東校区

#### 「みんなでつくる安心・安全な大里東のまちづくり」

校区の喫緊の課題である生活支援や災害時の福祉救援体制づくりをテーマに講座を開催した。生活支援実施地区に訪問し、取り組み状況や、事例を聞き、とても参考になった。この話を活かしてまちづくりをしていきたいとの意見が多く聞かれた。災害に関して平成30年7月豪雨災害体験報告会をした。住民の立場から町内会長、公的な避難所である市民センター館長、校区住民の避難受入に貢献している軽費老人ホーム施設長のそれぞれの立場から、当時の状況、問題点や今後の課題などを話し、共有した。地域が自主的に安心・安全なまちづくりに取り組み住民意識の向上につながった。



### 3. 小倉南区・企救丘校区

#### 「キクボで企救丘校区の安心なまちづくり」

日頃からの地域のつながりが、災害時に被害を最小限に抑えることが出来るため、平時から、しっかりと話し合っておくために研修を開催した。SNSでタイムリーな情報を共有し、企救丘防災プログラム(キクボ)を軸として、防災の取り組みを「チーム キクボ」で広げていきたい。



### 4. 小倉南区・志井校区

#### 「地域の福祉課題・解決方法を学び、みんなで取り組もう」 ～災害に対する方策や、防災訓練から学ぶ～

志井校区の地域課題である「災害に強いまち」について、毎年開催している「防災訓練」の反省を通して、これまでの校区での取り組みや連絡網・防災計画の必要性について、専門講師からの系統的な指導とアドバイスを受けながら町内や町内会の枠を超えた近隣圏域毎でも話し合いをすすめることができた。

一番の成果は、校区内では「戸建て」「集合住宅」の混在する地域性の中、組織率の低かった「福祉協力員」が、目標の70%まで達した事、町内毎に取り組むオリジナル防災計画策定への方向性が見いだされた事とのこと。



### 5. 若松区・浜町地区

#### 「みんなが安心して暮らせる支えあいのまちをめざして」

災害での助け合いをテーマに4日間の研修を開催した。避難時に障害がある方のお手伝いができる様、車いすや白杖で街歩きを体験。避難所で作るお粥防災クッキングを実習試食。避難所運営ゲーム(HUG)体験。朝倉へのバス視察では被災地の現場を見て話を聞くことにより、防災意識も高まり、みんなが安心して助け合える地区にしたいと地区の気持ちが強くなりひとつになった。今年度末には、これまでの振り返りとして追加研修を計画し、より意識を高めていきたい。



### 6. 若松区・若松地区

#### 「備えよう! 災害は突然やってくる」

災害をテーマに4日間の研修を企画した。1回目は災害に対する知識、避難の方法などを学習し、逃げることを考えた。2回目では地区の地図を広げ危ない箇所の情報交換を行い、地図に書き込んだ。ここで緊急事態宣言をうける1日講座は中止になり、8ヶ月後の10月に再開した。3回目は前回の復習から始め、危険箇所が書き込まれた地図を共有し、最後は、いつ、どこへ、何を持って逃げるか?それぞれマイルールを作成した。ルールが災害時の避難行動へ意識を切り替えるスイッチとなり、その意識づけに有意義な研修だったとの声が多く聞かれた。



### 7. 八幡東区・高見校区

#### 「ずっと高見で暮らしていくために」

福祉協力員や民生委員・児童委員など地域福祉活動者向けの講座を開催した。講師による講演の他にも地域活動者による事例発表の時間を設け、楽しみながら地域活動を行い、積極的に隣近所の方とコミュニケーションを取る大切さについて理解が深まった。これからも地域のつながりを大切にして安心して暮らせるまちをつくってほしい。



## シリーズ福祉エッセイ「しあわせづくり、ひとづくり」③



### こころのズレ

西南女学院大学保健福祉学部

教授・臨床心理士 中島 俊介 さん

歯医者に行くと靴を脱いだら靴下に穴が開いていた。恥ずかしかった。帰宅して妻に文句を言ったら、妻に「確認しなかったあなたの方が悪い!」と言われムツと来た。しかし確かに「観察力」の不足だった。ベテランの看護師さんや看護のリーダーの人たちと話して感心するのは「観察力・推察力」の鋭さである。患者のちょっとした変化にも敏感に気付くように訓練を受けるのだろう。言い方を変えると「心のアンテナ」(送・受信機)の感度をあげて使っているのである。ユングは人間のタイプを「思考」「感情」「感覚」「直観」の4つの機能の特徴で考えた。これを「心のアンテナ」に当てはめると、人は4つのアンテナのどれかを好んで送・受信していることになる。例えば「リンゴ」を目の前において、最初に浮かぶ言葉が「リンゴ」を「思考タイプ」は「リンゴ」や「果物」という。「感情タイプ」は「おいしそう」。「感覚タイプ」は「赤い」。「直観タイプ」

は「白雪姫」などと想像をめぐらす。ある看護師は一人の学生がいつも長袖のシャツを着ているのに違和感を持った。個別に呼んで話を聞くと手首にたくさんの傷があった。母親も気づいていないという。本人を勇気づけて親を交えての三者面談を行った。初めて母と娘が向き合い互いの本音がでた。その学生は見違えるほど元気になったという。その先生は「長袖」を見て「リストカット」を想像した。「直観」のアンテナを使ったといえる。自分の得意なアンテナを自覚しておきたい。子どもは「直観や感覚」を大人や教師は「思考や感情」を多く使うとされる。また相手がどのアンテナを使うかに配慮が必要である。ベテランの福祉職員のていねいな言葉遣いにはいつも敬意を感じる。必ず何かを伝えたい時に「相手の許可を得る」という手順を踏まれるからである。「今私が感じたことをお伝えしていいですか」といわれる。アンテナのズレを防いでいるのである。「思考と感情のズレた話」を学生に聞いた。食事中に父が沈んでいる。カレーが大好きなのに手元がすすまない。心配した母が尋ねると「いやちょっと悩んでいただけだ」と言った。すると母は場の空気を変えようと「そっかあー。それより話変わるけど、最近髪の毛薄くない」といった。それを聞いた父は「話変わってないよ」とつぶやき、カレーを残して自分の部屋に閉じこもったという。残念!

## 地域福祉活動指導者研修「トップセミナー」

10月25日(日)にボランティアフォーラムとして、今年のトップセミナーが開催されました。テーマは「ひとりじゃない、さえない。ウィズコロナの時代でも私たちがつながります。」「ふれあいネットワーク活動・ボランティア活動発信」。コロナ禍の自粛期間中、イベントや地域活動が次々と自粛になる中で、今できる事は何かを考え企画しました。

多人数でも感染予防対策を取りながら、研修会ができる事を発信すると共に、支えを必要としている方が孤独を感じないよう、地域福祉活動の再開についてのノウハウを共有するため、先進校(地区)区・福祉施設等の事例報告や意見交換会で構成しました。

来場者総数は205人。午前の部では企救丘校区社協からの市民センターを拠点にオンライン会議やSNSを活用し、安心安全なまちづくりの活動報告や、高須地区社協からは、高齢者への健康アンケートでの「居場所がなくなり淋しい。」という声を受け、コロナ対策を取りながらサロン活動を再開した活動報告等をいただきました。

午後の部では永犬丸西校区社協からは、ウェルクラブ児童の皆が集まる活動を中止にした代わりに、児童が高齢者へ暑中見舞いを出し、高齢者との温かい交流が生まれたエピソードや、高槻地区社協からは、感染予防対策を取りながら買い物弱者に寄り添う移動販売車、「わいわい市場たかつき」の再開の活動報告がありました。

午前・午後の部共通では、おきな社デイサービスからコロナウイルスが色々な困難を乗り越える事を教えてくれた事、施設でのボランティアの受入についても同様に、「様々な工夫と方法を考えていくので、もう少し待っていて欲しい。」というボランティア活動者に向けたメッセージや、北九州市立大学の坂本先生からは、今こそ試される地域の力と可能性についての活動報告がありました。

意見交換会では、当校久塚校長をコーディネーターとして、来場者を変えた質疑にも熱がこもりました。

コロナ禍で地域福祉活動が停滞する今、先進事例報告に学ぶ沢山の知恵と工夫と共に、会場から地域福祉活動者の皆さまへ、盛大なエールを送りました。

